

## 第2回オンラインFD学習会「同時双方向型授業の進め方」開催報告

2020年5月27日(水)16時半～18時にかけて、第2回オンラインFD学習会を開催いたしました。「同時双方向型授業をどのように進めていけばよいか」をテーマとし、TeamsやZoomを使って学生と顔を合わせながら授業を進める方法について議論しました。Teamsについては経営学科の平尾先生から、Zoomについては教育開発支援センターの西野から事例を提供し、その後参加者間でのディスカッション、最後にディスカッション内容の全体共有や質疑応答という内容でした。

今回のニュースレターでは前半の座学部分の様子をダイジェストでお伝えさせていただきます。

### 1. Zoomを用いた同時双方向型授業事例

経営学科1回生必修科目「基礎演習Ⅰ」(受講生24名)では、第2講から毎回Zoomを用いた同時双方向型の授業をしています。初回は14名しか出席者がいませんでしたが第4、5講ではほぼ全員が出席できるようになりました。要因として、同時双方向型授業への参加の仕方がわからなかった、参加しようとしたけれどもうまくアクセスできなかった、Wi-Fi環境が整っていなかったなどが挙げられます。1時間目ということもあり、寝坊して出られなかったという学生も毎回います。最後の学生はともかく、環境が整わず出席できなかった学生をフォローするために、授業で使ったスライドや資料などはTeamsで共有しています。

この授業では、情報収集の仕方、レジュメの書き方、プレゼンの仕方、レポートの書き方といったアカデミックスキルの基礎を身につけることを目標にしています。毎回課題を提示し、次の授業ではその課題に対するフィードバックとポイントを伝えることで授業としています。具体的には、「出欠確認(5分)」+「前回の授業振り返りコメントへのフィードバック(15分)」+「課題の添削(40分)」+「小グループに分かれての課題修正議論(20

分)」+「課題と次回授業の説明(10分)」というようにしています。

小グループのディスカッションは、「ブレイクアウトルーム」機能を使っています。この機能を使えば、ランダムあるいは教員の任意で小グループを作ることができて便利です。注意点としては、セッションを始める前に、具体的な指示をチャットに書き込んでおくことです。各グループのディスカッションの様子を観察できるわけではなく(各ルームに教員が顔を出すことは可能)、まとめた指示出しを随時することが困難です。ですから、あらかじめチャットに指示を書き込んでおき、各グループで何をするかわからなくなったら、チャットを確認するようにと伝えます。また、ディスカッションに行き詰ったり、質問がある場合は、「ヘルプ」ボタンを押すと、教員にそのことが伝わり、当該セッションに教員が参加し助けることができます。

この授業では、プレゼン大会も行いました。ブレイクアウトルームで予選を行い、学生同士で各ルームのNo.1を決めてもらい、その学生たちに全体(メインセッション)でもプレゼンをしてもらい(本選)ました。本選では、Zoomに搭載されている投票機能を使うことでスムーズにランキングを出すことができました。

Zoomの利点は、Teamsに比べて通信負荷が少なく、映像や音声不乱れることが少ない(それでもWi-Fi環境が脆弱だと乱れます)ことです。また、小グループでの議論と、全体での議論の行ったりきたりがしやすい点も魅力です。一方で、授業時間外に学生と連絡を取り合ったり、授業時間外に学生同士が議論したり、議論した内容を1か所に蓄積するということがZoomではできません。私も前半はZoomを使いましたが、後半はTeamsで授業を行う予定です。

## 2. Teams を用いた同時双方向型授業事例

先の事例と同じく「基礎演習1」の別クラスの授業実践です。実際の授業の始め方ですが、「チーム」の「一般」チャンネルの投稿画面の一番下に出てくる「今すぐ会議（実際はビデオカメラのような小さなアイコン）」を押して授業に参加してもらうようにしています。授業時間になったらこのボタンを押すという運びです。

なお、時間になっても来ない（Teamsにはアクセスしているのだけれど、なぜか授業には顔を出せていない）学生がいます。そのような学生は、「参加者を表示」をクリックし右上に出てくる「他のユーザーを招待」に当該学生の学籍番号を入力すると、その学生を呼び出すことができ便利です。

授業を行う際は、「デスクトップ画面の共有」をしながら授業をしています。つまり、学生の画面には教員のモニター画面が映っていて、この画面操作を教員が直接見せながら教えることで、学生が操作上躓くということを減らす工夫をしているということです。また、デスクトップ画面の共有であれば、他のソフトも同時に見せられます。エクセルやパワーポイント、ワードなどです。毎回共有する画面を変更するという手間を省くことができます。ただし、画面上のすべてが学生に見えてしまいますので、注意が必要です。

Teamsでも小グループディスカッションをすることが可能ですが、事前にちょっとした準備が必要です。「チーム」の「チャンネル」としてA~Fグループというように新しいチャンネルを追加しておきます。そして、どの学生がどのグループかという一覧もエクセルなどで作成しておき、授業中に指示をします。この授業では横のつながりを作る目的で毎回参加すべきグループが変わるためこのようにしています。毎回参加すべきグループが固定されている場合は、チャンネル名に学生の名前を入れておいた方が混乱が少ないかもしれません。また、チャンネル内の作業履歴が残るので、グループ固定の場合は振り返りができます。学生は、「チーム」→「チャンネル」→「今すぐ会議」という流れで各グループディスカッションに参加します。この流れも教員がデスクトップ上で実演すると、学生はスムーズに実行できます。

各グループディスカッションの成果を残すため

に、事前に各チャンネルに課題をワードファイルで添付しておきます。そこに記入させることで、議論を方向付けることができますし、各グループでどのような議論がされたかを教員も確認することができます。

操作が複雑になるため、Teamsで同時双方向型授業を積極的に行えるのは、受講生数が20名ほどまでの少人数クラスに限ったほうが良いという実感です。中規模のクラスでは、月に1回程度、全体セッションのみ（チャンネルにわかれたグループ討議は行わない）というようにしています。

## 3. 同時双方向型授業づくりのポイント

(1) 集合時間は早めに設定します。初参加者は15分前に、2度目以降も5分前には必ず集合！とするとトラブルを予防しやすくなります。

(2) 初回にツールの使用方法を一通り教え、使わせてみます。学生の方が早く慣れます。

(3) 原則カメラオンが望ましいが難しい場合は応相談とします。画面不要であれば、カメラオフで統一もOKです。

(4) チャット利用を推奨します。マイクがうまく機能しない場合は特に有効です。

(5) 小グループ内でのアイスブレイク（緊張を解きほぐすこと）は丁寧にします。対面と同様に学生は学生同士で議論することになれていないからです。

(6) グループワークの進め方を丁寧に教えます。教員が様子を見ながら対応することが難しいため、指示はあらかじめ具体的に出す必要があります。

(7) 講師用モニターをつくります。受講生からどのように画面が見えるかを確認できます。

(8) 欠席者フォローのために、授業スライドや授業動画を共有します。これらを外に出さないようにという倫理的指導は個別科目で必要でしょう。

(9) 授業前後に、希望者のみ雑談できる時間をとります。Teamsであればチャンネルをそのまま利用してOKということ伝え、Zoomであればブレークアウトセッションを再開します。

(10) 学生と共に教員も慣れます。最初から完璧を目指すのではなく、徐々にお互いできるようになっていく（時には学生に教えてもらう）という気楽さで良いのではないのでしょうか。